

君、見よ、双眼の色
大西赤人





君、見よ、双眼の色○大西赤人



君、見よ、双眼の色

一九七五年七月三〇日初版発行

著 者 大西赤人 ©1975

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号 一―一―二

電話 (二〇三) 四五一一

振替東京六一六四二二七

印刷所 信毎書籍印刷

製本所 ナシヨナル製本

1393-880160-4406

君、見よ、双眼の色

救急室

98

陥穽

80

夜の道連れ

61

浅春

50

肉親

36

満願

24

深淵

7

子供の時間

108

風変わりな炎

118

街で

127

疑惑

136

砂漠へ

145

星の王子さま

168

奥書き

177

装本 中島かほる
装画 大浦 信行

君、見よ、
双眼の色

深淵

——裸足の王者アベベ・ビキラに

1

沿道に立ち並ぶ観衆の甲高い声援が、梶原の神経を微かに刺戟した。風もなく、太陽も薄雲に隠れている、冬の穏やかな一日。それは、絶好のマラソン日和であった。

そして、「第八回日報杯マラソン」は、あたかもそのクライマックスにさしかかろうとしていた。走りつづける梶原を、三十八キロ地点を示すマークが、四百メートル前方で待っている。しかし、彼は、先頭ではなかった。梶原の前を進むテレヴィ・ラジオ中継車や大会関係車の向こうに、彼の中学以来のライヴァル・小笠原が先行していた。

小笠原は、スタート直後から積極的に飛ばして、それまでトップを守ってきた。だが、山場の三十五キロ地点を過ぎてからの彼は、眼に見えて疲労の色を濃くし始めた。額の汗を頻りに拭い、時々左の脇腹を押

さえる。そんな小笠原の苦しそうな後ろ姿を、梶原は、追う者の強味を発揮して、冷静に見守っていた。二人の間隔が、着実に狭まっていく。

『五十メートルを切ったな。』

梶原は、落ち着いて、そう目算した。三十キロ地点通過時の梶原は、三位であった。小笠原から五十メートル弱の差でイギリスのブロック、ブロックからなお四十メートル弱遅れて梶原、という状態。ところが、三十三キロ地点でブロックが棄権した。以前にも痛めたことのある右腿の筋肉痛が再発したのである。当然、梶原は二番手に上がった。そして、確実なビッチで小笠原に迫り、かつ今や追い抜こうとしている。三十八キロ地点を、まず小笠原が、踏みしめた。

「梶原の激しい追い込みです。小笠原に続いて、梶原も……今、三十八キロ地点を通過しました。タイムもいいですね、大会新記録は間違いありません。ところで、両者の差は約四十メートルに縮まりました。ゴールまで、残る四キロの争いです。三番手グループの島津、ブラウンらは大きく離されていますので、優勝争いは完全に二人に絞られました。」

ラジオ・アナウンサーが、二人を交互に見ながら、興奮した調子で放送している。そのアナウンサーの乗った中継車の横を、梶原は、軽快なストライドで通り抜けた。沿道からの声援は、六分四分の割合で、常勝梶原よりも小笠原に味方している。だが、それらの声援も虚しく、小笠原のフォームは徐々に崩れを大きくしていく。

広い幅のアスファルト道路は、突然左へ曲がり込んだ。先導のオートバイに続いて、二人も進む。ゴールの競技場まで、コースはもうほぼ一直線である。四十キロ地点が近い。二人の間隔は、二十メートルとなり、しかも刻々狭まっていく。小笠原の九番のゼッケンが、弱い風に苦しげにはためいた。首の動きも大きくなった。対照的に梶原のストライドが映える。

『まだまだ。奴が振り返った時、その瞬間にスパートだ。』

梶原は、小笠原の首筋の辺りに眼を据えた。彼は、無理な抜き方はしない。一度だけ「別府マラソン」の際、二十キロ地点で早々とトップを奪い、小笠原にビッタリくっつかれ、敗れこそしなかったが、散々苦勞した、——その経験が身に染みているためである。相手をギリギリまで疲れさせ、サッと追い越す。それが梶原の流儀であった。二人の差はやがて僅か十メートルとなり、ついに小笠原が振り返り、梶原を認めた。二人の眼と眼が合った。

『ここだ。』

梶原は猛然とスパートした。並ぶ間もなく、梶原が先頭に立った。小笠原も顔を歪めて必死に離されまいと努めた。だが、彼にはもう余力がない。みるみるうちに差が開く。「第八回日報杯マラソン」と大書されたアーチを潜り、梶原は、競技場のゲートへ飛び込んだ。ゲートの下の黒い影から、明るいトラックへ彼は勇姿を現わした。拍手が上がる。

「あ、見えました。やはり、梶原。セッケン七番の梶原がトップ。逆転です。続いて、小笠原もゲートから姿を見せましたが、疲れている。苦しそうです。梶原との差は二十メートル。再逆転は不可能でしょう。梶原が、スタンドの歓声に、ほんの少し応えています。あまり嬉しさは見えません。勝利に慣れ切ってしまったのでしょうか。」

右手を頭上に掲げた梶原は、すぐ下ろし、規則正しい走行を継続した。ゴールまで二百メートル。小笠原との差は三十メートル強。

「梶原、あと百五十。ゴール間もない。あと百メートル。これで梶原は、マラソンとしては驚くべき……。」「『ゴールイン。八連勝。』」

白いテープを胸で切りながら、梶原は、微笑した。ヴィクトリー・スマイル。係員がバスタオルを持って

きた。梶原は、それを火照った肩にかけ、ゴールへ近づく小笠原を待った。

「小笠原もゴールイン。これも大会新記録、二時間十一分四十五秒三。万年二位の異名を取る小笠原、今回もまた二位に終わりました。残念であります。パツタリとフィールドに倒れ伏しています。」

うつ伏せた小笠原のそばに、梶原が歩み寄った。その気配に気づいたのか、小笠原は、仰向けになり、梶原を見上げた。彼は、悔しそうに言った。

「また負けたな。」

梶原は、小笠原の隣に並んで腰を下ろした。

「俺の方を振り返っただろう？ あそこが、勝負さ。惜しかった、と人は言うだろうがね。」

競技場には、やっと三番手の選手が入ってきた。新聞やテレビなどのインタヴューが、梶原たちの方へやって来る。小笠原が、つまらなさそうに言った。

「お前さえいなけりゃ、インタヴューの中心目標は俺になるはずなんだがなあ。」

何も答えず、梶原は、立ち上がった。

2

日報杯マラソンの翌々日。午後三時。梶原と小笠原とは、三位に入賞したアメリカ人選手ブラウンと共に、テレビ番組出演のためスタジオにいた。『スポーツ春秋』というこの番組は、日曜日の午前七時三十分から二十五分間放送されるもので、視聴率は高くはないのに、十年間の伝統を誇っている。アマ、プロを問わず、その時その時、話題になったスポーツマンを、インタヴューするたわいない内容だが、固定ファンがいるため、長寿命を保っているのである。

放送はVTR。録画開始時間が迫っている。男女一人ずつのアナウンサーに挟まれた恰好で、三人は、扇

形のテーブルを囲んだ。左から梶原、小笠原、ブラウンの順番である。ディレクターが合図をして、男性アナウンサーが話し出す。

「皆さん、お早うございます。村上融二です。今朝は、先日の日報杯マラソンで三位までに入賞された、この方々をお迎えして、色々とお話を伺いたいと思います。」

三人が次々に紹介される。

「では、まず梶原さんにお聞きしますが、聞く所によりますと、梶原さんと小笠原さんとは、中学時代からのマラソン友達なのだそうですが？」

梶原と小笠原とは、神奈川県川崎市で生まれた。彼らの最初の出会い、中学二年の時であった。一年の時から陸上競技部で活躍していた小笠原が、同級になって気の合った梶原を、いわば強引にスカウトしたのだ。それまで専ら勉強中心の学校生活を送っていた梶原は、運動部への参加を渋った。

「……すると小笠原の奴、『友達だろ。』ってスゴ味を効かすんですよ。これでは断わるわけにも行かないような気がして、不承不承、入部をオーケーしました。」

ところが、梶原の逼塞^{おそく}していた力は、一気に爆発した。彼は、三年生の県大会で、早くも短・中距離二種目に日本中学タイ記録を出して、日本陸上界将来の明星と持てはやされる。入学勧誘も、県内都内十数高校から。まさに金の卵であった。

「……そんなわけで、小笠原の無理矢理なスカウトを拒否していたら、今日の僕はなかったかもしれません。ただし、僕らがマラソンを始めたのは、高校に入ってからです。」

女性アナウンサーの通訳を聞きながら、ブラウンも、興味深げである。司会者の村上は、次に小笠原へ話を向けた。

「おや、そうなんですか。では、その辺の事情は、小笠原さんに話していただくことにしましょうか。」

小笠原が、照れくさそうにしゃべり出す。梶原も隣でニヤニヤと顔を崩した。

「なにしろ僕は、中一・中二の頃は、陸上競技部の中心メンバーの、そのまた軸として君臨していたわけでしょう？　それが、梶原が入部してからというもの、僕の影が急に薄くなってしまった。これは、僕としても相当に面白くなかったですよね。」

ブラウンを除く四人が笑い、通訳を聞いたブラウンが一足遅れて微笑んだ。小笠原は、卓上のオレンジ・ジュースを一口飲み、話を続けた。氷が、コップの中でぶつかり合い、小さな音を立てた。

「梶原は、その頃主に二百と八百とを走っていて、僕は両種目とも奴にかなわない。出来れば同じ高校に進みたいが、このままでは何時になっても梶原の後塵を拝さなければならぬと思ったんです。そんな矛盾を感じつつ、結局、僕は――僕も彼も、揃って東海総合体育大学の付属高校に入り、もちろん陸上競技部へ。そこで、僕は一計を案じたんですよ。」

「小笠原は、マラソンに転向したんです。」

梶原が口を挟んだ。

「そういうこと。元来僕の体質は長距離に適しているような気がしていたし、実際にトレーニングを始める、いい手応えがあつて、僕はファイトが出て来たんです。そうしたら、今度は梶原もマラソンをやるって言い出した。」

村上が梶原に尋ねた。

「どうしてマラソンに代わられたのですか、梶原さん。」

「いや、別に理由というほどの事はなく、その頃はとにかく走るのが楽しかったので、どうせなら一番長い間走っていられるマラソンをと考えて。」

「梶原の場合は、随分コーチや県の偉い人などからも転向に反対されましたよ。僕と違って、奴は既に記

録を作るほどのランナーだったのですからね。」

「なるほど、当然そうでしょう。」

「だから、最初の内は僕の方が有望視されていたようです。梶原は半信半疑の眼で見られていたな。初めて出た大会で僕は十五位、梶原は途中棄権。それが三度目のレースで、もうほぼ同タイム。大学四年の今では、また中学時代に逆戻り。歯が立ちませんね。全く、奴は万能ですよ。」

梶原が慌てて言った。

「そんな。いくら僕が八連勝といっても、小笠原には大変苦しめられているし、彼がいるからこそ、励みになって勝ってこれたんです。」

「なあに。どうせ僕は万年二位だから。」

小笠原のフザケとも本気ともつかぬボヤキに、また皆が笑った。

「さて、ブラウンさん。今回は三位に入賞されて、おめでとうございます。上位の二選手には、どんな印象を持たれましたか。深町さんに通訳をお願いします。」

番組はスムーズに進行している。

3

録画を終えた二人は、二階の喫茶室でしばらく休むことにした。年末から新春にかけての特別プログラムが撮り貯めされているのか、喫茶室には数多くの俳優や歌手がたむろしていた。

「おい、あれは榎香織だろう？」

「うん。一緒にいるのは、川奈ユミだ。俺は、あいつの“Why?”って歌が大好きだったんだよ。こんな近くで見るのは初めてだな。」

小笠原は、注文したコーヒーなどには見向きもせず、右手前方三メートルの席に坐っている川奈ユミという女性歌手に瞠目していた。梶原が苦笑して囁いた。

「いい加減にしろよ、恥ずかしい。こっちまで迷惑だぞ。それはそうと、今日は、日頃無口なお前に似合わない、しゃべりまくったな。隣でヒヤヒヤしていたぜ。」

やっと正面を向いた小笠原は、ソファーに背を深くもたせかけ、低い声で言った。

「ああ。一昨日のレースは、相当ショックだったからな。その反動だよ。今度こそ逃げ切れたと思ったが。今のお前と勝ち負けのレースが出来るのは、イギリスのマーティンぐらいだろう。」

「サンキュー。そう言われると嬉しいよ。マーティンは、来年二月の京都国際大会に来日するらしいから、決着をつけてやる。」

梶原とマーティンとは、過去二度対戦している。一昨年の京都大会ではマーティンが優勝、梶原は二位。去年のボストンマラソンでは、立場が逆転し、梶原が一位を獲得した。もし来年二月に対戦するなら、その結果如何により、たしかに一定の力量判定が下されるであろう。

小笠原が、大分暗くなった窓外に眼をやった。放送局の建物脇を通っている道路は、夕方の交通ラッシュの最中である。行き交う車を見下ろして、彼は、言った。

「俺、最近ノイローゼ気味だ。」

「ノイローゼ？　どんな風に？」

「なんだか、ひどく時間が気になるんだよ。それも、ただ時計を見て何時か知るだけでは治まらない。その時間が正確かどうか、問題なんだ。例えばさ、お前の時計は、今、何時になってる？」

「四時十九分……三十秒ぐらい。」

「ほら。壁の時計を見ると、十九分より少し前だろう。そして、俺のは四時二十分……十六、十七、十八。ど